

本生經における他界思想

——『六度集經』を中心として——

伊 藤 千 賀 子

序

大乘という自覚の下における本生經とは、究極の理想の姿である現在の釈迦の存立基盤となった過去世と現世とを貫ぬいて流れる法を説示するものである。釈迦は現世の事象の一を過去の事象と照合することによって解明し、過去世と現世とを貫ぬく法が同一であることを証し、過去世・現世・来世におけるすべての事象が法の顯現であると説く。ではその法とは何なのか。その法に基づく救済の論理とは一体どのようなものなのか。

本生經の編纂方法は、大別すると次の三種に分れる。

- (一) 仏伝を叙述する目的の下に集めたもの。
- (二) 菩薩行を高調する目的で集めたもの。
- (三) 目的なしにただ集めたもの^①。

しかし、一つの集を編纂するという行為は、たとえ、それ

が(三)の目的なしに、ただあちこちから集めて編纂したものであっても、編者は数多くの話の中から取捨選択することによって、一つの思想を貫いているものである。同一の目的意識によって編纂されたものであっても、編者が異なれば、その対象とする享受者、人間観、罪の規定、救済の論理等々は異なるはずである。

本稿は、本生經を五道輪廻による人間界と他界の往來の物語としてとらえ、前述の点を考察しながら、大乘意識の下に編纂された『六度集經』における編纂の目的は何か、そこに描かれる法とは何か、その法に基づく救済の論理は真に全ての衆生に適用されうるものなのかをさぐってゆくものである。

一

本生經はふつう、出家と在家とを対象に編纂されたものと

されているが、本當にすべての本生經が一般民衆をも対象として編纂されたもののだろうか。『六度集經』の「布施」の「序」に、

時に五百の応儀、菩薩千人と共に坐したまふ。中に菩薩あり。阿泥察と名づく。仏、經道を説きたまふに、常に靖心として惻隱なり。寂然として無念なり。意、定んで經に在るなり。衆祐これを知り、為に菩薩六度無極難逮高行を説きたまひて、疾く仏と為るを得しむ。

とあり、仏が六度を説いて聞かせた「阿泥察」は、千人いた菩薩の中でも、とりわけ見どころのあるすぐれた者であった。すなわち『六度集經』は右の引用から見ると、一般人や在家などの凡夫ではなく、修行を重ねた専門家、その中でもとりわけ優秀な人物が「疾く仏と為る」ために説かれたものである。

では「仏と為る」ことの最終目的とは何か。

第一話「菩薩本生」に、

吾れ、仏を求むるは、衆生を擯んで済ひ泥洹を得、生死に復らざらしめんと欲す。

第二話「薩波達王本生」に、

誓願して仏たらんことを求め、衆生の困厄を拔済して泥洹を得さしむ。

第二八話「象王本生」に、

誓願して仏を得たらんに當に一切を度すべし。

とあり、その目的は衆生に悟りを得させて輪廻を抜けさせることであつて、その手段として六度の菩薩行を説いたのである。

では、『六度集經』は救済すべき衆生をどう捉えているのか。

第二話に、

吾れ衆生の盲冥に没して、三尊を覩ず、仏の教えを聞かず、心を凶禍の行に恣にし、身を無摂の獄に投ずるを覩る。

第九話「普施商主本生」に、

衆生は万禍なり。吾れ當にこれを済ふべし、仏儀を覩ず、明法を聞かず。

「持戒」の「序」に、

狂愚兇虐にして好んで生命を残す。貪余盜窃し、姪妹穢濁に両舌惡罵し、妄言綺語、嫉恚癡心もて親を危くし、聖を謗す。仏を謗り賢を乱し、宗廟の物を取り、兇逆を懷き三尊を毀つ。

とあり、仏陀の眼から人間を捉えて、「恣に」「好んで」惡を為すどうしようもなく愚かな存在、この存在の根底に惡を内在するものと定義している。

では、惡人である人間が犯した罪とは具体的に何であつたのか。地獄に墮ちた原因を拾つてみると、

第六話では、帝釈天が己の位を奪われることを恐れて、善

王をわなにかける。

第一二話では、罪人と姦通し、道士の殺害をはかる。

第二八話では、嫉妬により象王を殺害する。

第三八話では、善政を敷いている王が、出遊時に導臣を除き、国民を惶懼させた。

第三九話では、母の頭を踏む。

第五三話では、盗み。

第八三話では、殺人と姦婬邪祀。

などが認められ、五逆十悪を中心として罪は規定されている。^①

しかし、「心に」「恣に」「好んで」悪事を為したとしても、その本人には、やはりそうせざるをえない事情があり、後悔や反省などもするはずである。そういういわば罪を犯した者の心の内側・心の動きを描いたものに、第五三話「六年守飢畢罪経」がある。

ある夜、梵志は喉が渴いて池の水を飲んだ。暗がりで見づかったが、明らかに持主のいる池であった。梵志は持主の許可を得ずに水を飲んだことは、他人の物を盗んだことになるので、この罪のせいで、来世に畜生や奴婢となったりしないために、現世でこの罪のつぐないをしようと思い、国王に罰してくれるように頼んだ。これを罪と思わなかった王は、他の用事で梵志のことをすっかり忘れ、六日の間、梵志は全く飲食せず、その場で国王を

待つことになった。このことによって王も梵志も罪のつぐないは済んだと考えたのだが、仏法上は罪をつぐなったことにはならず、生死輪廻をくり返した後、いよいよ仏陀となるその寸前に、この償いとして、六年もの断食修行を余儀なくされた。

このようにささいな事でも、仏法で規定されている罪を犯せば、それは後々までついてまわり、現世でつぐなおうとしても償えず、しかも仏となるには、その前に必ずどこかで償わねばならないとしている。

また第五四話「釈家畢罪経」に、

罪をいかにともすることなけん。(略) 悪を種ゑなば禍生ず、孰れか能く之を攘はん。^②

ともあり、やはり犯した罪は現世におけるどのような手段によっても消えることはないとされている。

すなわち『六度集経』においては、罪や罰に関する限り、「心」は全く問題とならないのである。

だが、すべての本生経が心の内側を取り上げず、三惡道に堕ちて定められた期間、つぐないをしなければならぬとしているわけではない。

例えば『雜宝藏経』七「慈童女の縁」では、地獄に堕ち、火鉄輪を頭につけられ苦しんでいる菩薩が、自分と同じ罪を犯し、同じ罰を受けねばならぬ者たちが数えきれぬ程存在すると知って、「願はくば一切をして苦を受けしむべきは

盡く我身に集まれ^①」と願った途端に、火鉄輪は頭からはずれて地に墮ち、菩薩は兜術天に生まれ変わった、とあり、反省や後悔をすれば、罪は滅し、罰はその場で、あるいは期間が短縮されて終わる。このように本生經によつては「心」に重きを置いてゐるものもある。

二

衆生が生死を抜け出るには三宝への皈依がその入口となるが、『六度集經』では、どのようにして衆生を仏教へと皈依させるのだろうか。これは二種に大別される。

そのひとつは、第九話に、

吾れ当に其の耳目を開きて其の盲聾を除き、之をして無上正真衆聖の王、明範の原を觀せしめ、聞かせしむべきなり。布施して誘進すれば服従せざるなし^②。

とあり、人間なんて現金なものだから、物をやれば仏教を信するようになるという、一種の現世利益（？）を施すことによつて、現世で仏教に目覚めさせ、衆生を救おうというのである。布施をするには、布施をする——この場合には、凡人がもらつて喜ぶ——品物や金が必要である。そのため主人公が宝を集めに共同体の外側の世界——民俗学ではこれも他界——へ出かけて行くのが第八話「仙歎理家本生」と第九話「普施商主本生」である。この布施をするものを集めた他界

へ行くというのは、古代においては、共同体はあらゆる面で限定されており、もちろん富も定まった量しかなく、限られた量を共同体内の全員で分け合つていた、すなわち一つのポットから全員で取りあうようなもので、普通の状態では、一人だけが突然裕福になるということはありません、今まで以上の財を求めるならば、共同体の外側の地域から取り入れるより以外に方法がなかったのである^③。

しかし、金品によつてつられて入つた信仰などというものは、所詮、底の浅いもので、仏教に入るきっかけにはなつても、厳格な修行を積もうという道心を起こすまでには仲々至らないであらう。つまり、仏教へ皈依するきっかけとなつたということは、いつの日か輪廻を抜け出る可能性があるということなのであらうか。

もう一つの救済の方法は、第一六話「四姓經」に、

斯くの如きの元惡は寧んぞ、脯割に就き、市朝に蒞臨して、終に仏三宝を信じ、四恩普く済ふと為さざらんや^④。

とあり、これを具體的に本生經としたものが第三八話「太子墓魄經」である。生まれてから十三年間、口をきかなかつたため、生埋めにされそうになつた菩薩は、長年、口をきかなかつた理由を次のように述べてゐる。

太山に入りて焼き煮られ割裂せらるること六万年を積む。死を求めども得ざりき。呼嗟すれども救ひ無し。（略）壹たび之を憶ふ

毎に、心但だ骨楚するのみ。身は虚汗と為り、毛は寒堅となり、言往ひて禍来る。殃は影を追ふて尋ぬ。言を發するを欲すと雖も、復た咎を獲んことを懼る。(略)是を以て舌を縮めてすべて言無からんことを欲す。⁽¹⁹⁾

とあり、その根底に惡を内在し、その上、自己認識の智をもたない衆生は、惡趣に墮ちてはじめて人智に目覺め、仏法の凝視へと向うのである。

結

仏陀のもとに視座を置き、人間を見つめ断罪する編者は、同時に心の奥底に慈悲をいだき、この迷妄の輩どもを救う手だてとして、一人でも多くの願生の仏を世に送り出さんとして、この集を編み、已に菩提心を發し、さらに記別を受けた菩薩でも、成仏のためには、三阿僧祇劫の長遠の修行を必要とし、また無量の輪廻転生の間には限りなく惡趣へ入ることは免れ得ず、それゆえ恐れることなく、否、積極的に惡趣へ向かえ、と説いているに相違ない。

- 1 千濁龍祥「改訂増補、本生經類の思想史的研究」山喜房仏書林 一九七八年 九二頁
- 2 大正三・一a
- 3 大正三・一b
- 4 大正三・一c
- 5 大正三・一七a

本生經における他界思想(伊藤)

6 大正三・一九a、二六a、二八b、二九b、四四b、四六a
にも同様の表現あり。

7 大正三・一c

8 大正三・四a

9 大正三・一六c

10 大正三・一五b、四九b、cにも同様の表現あり。

11 あくまで「地獄に墮ちた」と記されているものを挙げた。

12 菩薩が畜生として生を享けている話は多数収録されているが、畜生として生まれた原因に関する記述はない。また餓鬼道へ墮ちたという話は全くない。

13 波羅夷罪。平川彰「大乘仏教の特質」『講座・大乘仏教1』春秋社 昭和五七年 四一頁参照。

14 大正三・三〇a

15 大正四・四五一c

16 大正三・四a

17 小松和彦「世捨てと山中他界」『神々の精神史』北斗出版を参照。

18 大正三・一六c

19 大正三・二〇c

20 平川彰「大乘仏教の特質」『講座・大乘仏教1』春秋社 四

五頁

△キーワード▽ 本生經、六度集經、救済の論理

(早稲田大学大学院)